『周防内侍集』注釈（三）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 順子, Ono, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065771

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『周防内侍集』注釈（三）

Commentaries of "Suou no naishi shu," (3)

大野順子

Junko ONO

時雨るる夕暮れに、院の中将信宗「小倉山の紅葉見になん行きたりつる」とて、「深き紅葉の枝を見よ」とておこせたれば

21　我がためはあらしの山の紅葉葉の深き色にはいかでみすらん

【底本】

しくるゝゆふくれに院の中将のふむねをくら山のもみちみになんいきたりつるとてふかきもみちのえたをみよとておこせたれは

わかためはあらしの山のもみちはのふかきいろにはいかてみすらん

【通釈】

時雨の降る夕方に、院の中将信宗が「小倉山の紅葉を見てきました」と言って、「濃い色をした紅葉の枝をご覧ください」と（紅葉の枝を）よこしたので、

私のためではない嵐山の紅葉の葉を、どのように深い色に見せようというのでしょうか。（私に対する深い思いなどありはしないでしょうに）

【参考歌】

①小倉山峯の紅葉ば心あらば今ひとたびのみゆき待たなん

（拾遺集・雑秋・一一二八・藤原忠平／百人一首・二六）

②大井川古き流れをたづねきて嵐の山の紅葉をぞ見る

（後拾遺集・冬・三七九・白河天皇）

後一条院御時、上達部殿上人、嵯峨野の花見にまかりて内に帰へり参りて侍りけるに、中宮の御方の台盤所の御簾に、女郎花の枝を挿されたるを見てよみ侍りける　堀川右大臣

③一枝の花の色だにあるものを野辺の錦を思ひやらなん

（玉葉集・秋上・五二三）

語らひし人の、七月五日ばかりに、まゆみの紅葉たらむ枝をりてとある遣りたれば

④秋もまだ浅き紅葉の色を我が心深くも頼みけるかな

とありければ、深き蔦の紅葉に書きて、そのまゆみの枝に添へてかく言ふ

去年の秋深き紅葉にくらべ見よ色はことにも劣らざりけり

（輔親集・一二〇／一二一）

⑤奥山に心を入れてたづねずは深き紅葉の色を見ましや

令和3年10月1日受理

（大和物語・四七段・六四・陽成院の一条の君）

⑥秋も今はあらしの山の山高みいかで残れる紅葉なるらん
（公任集・二〇七）

⑦霜枯れのあふぐなげきの枝なれば深き色とは見えずぞありける
（馬内侍集・七九）

【語釈】

○時雨るる夕暮れに…時雨が降る夕方に。「時雨」は、晩秋の九月から初冬の一〇月にかけて降る通り雨のこと。平安時代には、時雨は初冬にあたる一〇月のほうへ傾いていく。**○院の中将信宗「小倉山の紅葉見になん行きたりつる」とて**…院の中将信宗が「小倉山の紅葉を見に行ってきました」と言って。「院の中将信宗」は源信宗のこと。源信宗（生年未詳～延久六年（一〇七四）六月三〇日　三六歳［尊卑分脈］、もしくは永長二年（一〇九七）八月三〇日［勅撰作者部類］）は、父が小一条院敦明親王、母は源政隆女の瑠璃女御。長久四年（一〇四三）～永承五年（一〇五〇）は右近衛中将、永承五年～治暦四年（一〇六八）は左近衛中将。正四位下、民部大輔、左近衛中将などを歴任し、院中将と呼ばれた。『後拾遺集』と『金葉集』に各一首入集。『金葉集（二度本）』四八五番歌の詞書の通りであれば、ある時期に周防内侍と恋愛関係にあった。『後拾遺集』五九五番歌には、小一条院が永承六年（一〇五一）に崩じて後に、老齢の伊勢大輔と歌を詠み交わしたことがみえる。「小倉山」は山城国の歌枕で、現在の京都市右京区。西南には桂川（大堰川）が流れ、川を隔てた麓には嵐山がある。宇多院の大井川行幸のときに詠まれた①が著名な、紅葉の名所。「紅葉」は、おもに秋の素材とされ、紅葉を染めるものとしては「時雨」が一般的。信宗の活躍期に行われた紅葉見物としては、承保三年（一〇七六）一〇月二四日の白河天皇の大井川行幸（『今鏡』・『十訓抄』・『本朝続文粋』など）がよく知られており、天皇自ら嵐山に散る紅葉を詠じた②が『後拾遺集』に残る。ただし、本詠がこの行幸に供奉した折りに詠まれたのか、あるいは、殿上人らとの気楽な遊覧が行われたときのことであったのか、詳細は不明。「院の中将」と呼ばれていた時の歌であるならば、中将であった長久四年～治暦四年の間に詠まれたことになる。類似する状況の作としては、殿上人が内裏から女郎花を見に出かけていき、再び花の枝とともに戻ってきたことを詞書に記す③がある。**○深き紅葉の枝を見よ**…濃い色に染まった紅葉の枝を見てください。『輔親集』の贈答歌④や『大和物語』四七段の⑤などに、紅葉の色の深さと思いの深さとを重ねた恋歌がみえる。実際に恋仲であったのか、恋人同士を装った贈答歌であったのかはわからないが、信宗は、時雨によって増した紅葉の色の深さと周防内侍への深い思いを重ねてみせた。**○我がためはあらしの山の紅葉葉**…私のためではない嵐山の紅葉の葉。「有らじ」と「嵐」が掛詞。秋ではなくなってしまった嵐山を詠じた⑥でも同様の掛詞が用いられている。「嵐の山」は、山城国の歌枕である「嵐山」のことで、紅葉の名所。②でも嵐山の紅葉が詠まれている。「我がためはあらじ」とは、信宗にとって、嵐山での遊覧こそが本来の目的であり、苞として持ち帰られた紅葉はついでのようなものでしょう、ということ。周防内侍は、大井川を見に行った殿上人のために代作した二七番歌でも「あらしの山の紅葉葉」の「色」を詠じている。**○深き色にはいかで見すらん**…いったいどのように深い色に見せようというのでしょうか。詞書の「深き紅葉」を受けたもの。紅葉の枝の色濃さに、枝を送ってきた人の心深さを重ねつつ、そもそも私のために出かけて折ってきた紅葉ではないのだから、葉の色がどれほど深かろうと私への思いの深さには繋がらないと切り返す。⑦は霜枯れの紅葉からはあなたの思いの深さは見えてこないとする。

【補説】

上村氏は、周防内侍が結婚していたのか不明とした上で、二二・

八八・九一・九二番歌などを例にあげ、内侍は「はっきり求愛を受けぬ意思表示をしている。ここで注意すべきことはこうした求婚的恋文を受けとった内侍は相手の姓名を明示していないことである。後にも述べるが、通俊や匡房や伊房たちとは恋愛の歌の贈答でも名を明示している」と述べる。これは詞書の編集にあたり、恋歌をよそおった社交上のやりとりの場合には相手の名を明らかにする一方で、実際の恋愛・結婚にかかわるような歌では相手の名を秘していたという指摘である。

これに従うと、信宗とも恋愛関係にはなかったということになるが、『金葉集』には次のような歌が残されている。

周防内侍親しくなりて後、「ゆめゆめこのこと洩らすな」と申しければよめる　源信宗朝臣

逢はぬ間はまどろむことのあらばこそ夢にも見きと人に語らめ

（金葉集二度本・恋下・四八五）

この詞書きを信ずるならば、信宗は周防内侍の恋人ということになろう。

一方で、信宗にはさまざまな所に出仕する女房たちとの付き合いの広さを感じさせる応酬も残されていて、ふたりが恋愛関係にあったとも断じがたい。

熊野に詣で侍りけるに、小一条院の通ひ給ひける難波といふ所に泊まりて、昔を思ひ出でてよめる　源信宗朝臣

いにしへに難波のことも変はらねど涙のかかるたびはなかりき

かく詠みて侍りけるをつてに聞きて、かの信宗の朝臣のもとに遣はしける　伊勢大輔

思ひやるあはれ難波の浦さびて葦のうきねはさぞなかれけん

（『後拾遺集』哀傷・五九五／五九六）

院の中将、「『おもしろきところ見せむ』と大進の君誘ひて、見せよ」とのたまひて

紅葉葉の散らぬ先にと誘はむに見じといふなる人はあらじを

返し、「かくとこそは思ふらめ」とて

紅葉葉はあだなるものと知りながら心と見てや散るを嘆かむ

（四条宮下野集・七九／八〇）

上東門院付きの女房であった伊勢大輔が、人づてに耳にした信宗の歌に同情を寄せ、わざわざ歌を詠みおくっているあたりに、女院の女房とも如才なく交流していた信宗の姿がほのみえる。

また、『四条宮下野集』の贈答では、「『素晴らしいところをお見せしましょう』と大進の君を誘って、その折りに会わせてください」と言いつつ「紅葉が散らないうちにと誘ったら、見まいなどと言う人はいないでしょうから」と歌って、親しい間柄と思われる下野（彼女を信宗母である瑠璃女御自身、あるいはその姉妹とする説がある。）を楽しげにそそのかしている風情である。これに対して下野のほうは、おあいにくさま、大進の君はあなたの移り気をご存じだから、紅葉のお誘いなんてとてもとても……、と呆れた内心が歌にあらわれている。

本詠の詞書きでも、だれかと紅葉を見に行った後で周防内侍に「深き紅葉の枝」を送って、これは私のために行ったのじゃなかったでしょう、と切り返されており、下野との贈答とどこか通じるものがある。紅葉を口実にした信宗が、あちこちで女房たちに戯れ掛かっていたのではないかと、つい邪推したくなる。

人のもとより「文やる人繁く聞こゆる」と言ひたるに

22　おとづるるをぎふの風は繁けれど末葉の露はなびかぬものを

【底本】
人のもとよりふみやる人しけくきこゆるといひたるに
おとつるゝをきふの風はしけゝれとするはのつゆはなひかぬものを
【通釈】
ある人のところから、「（あなたに）手紙を送る人が絶えないと評判ですよ」と言ってよこしたので。
葉擦れの音をたてて荻が生えているあたり（を吹きすぎる）風は絶えないけれど、末葉に置く露はなびいたりしませんのに。（私だって、どれほど手紙が届いても、そちらに靡いたりしませんよ）。
【参考歌】
兵衛の佐なる人語らふとみな人聞きて後、中将に文通はしければ、人の聞きて言ひたる
①柏木は雨も人めも繁しとてみかさの山にふみ通ふとか
（馬内侍集・九三）
②しもかれは侘しかりけり秋風の吹くには荻の訪れもしき
（和泉式部集・四〇六／和泉式部日記・一一四）
③武蔵野のあしのをぎふを分けゆけばは末よりこそ空はみえけれ
（散木奇歌集・野望草滋・三六八）
④秋来てはとふべき物と待たれつる庭のをぎふに風そよぐなり
（建長八年百首歌合・左春右秋・八十三番右・一六六・藤原良教）
⑤いつも吹く風とはきけど荻の葉のそよぐ音にぞ秋は来ける
（続後撰集・秋上・二四四・紀貫之）
⑥世のつねの秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし
（新古今集・恋三・一二一二・安法法師女）
⑦川風にそよとばかりは答ふとも荻の上葉はつゆもなびかじ
（四条宮下野集・一〇）
【語釈】
○人のもとより、「文やる人繁く聞こゆる」と言ひたるに…ある人のところから、「あなたに手紙を送る人が絶えないと噂になっていますね」と言ってよこしたので。時期は不明ながら、周防内侍が熱心に言い寄られているという噂が立った。馬内侍と兵衛佐のことが噂になったあと、中将と文を交わすようになったことが人に知られたことから、実際のところを尋ねる①は、本詠と状況が近い。九一番歌の詞書にも、本詠と似た状況が残されている。**○おとづるる**…荻の葉擦れの音をたてる。葉擦れの音を立てる意の「おとづるる」に、便りがあるの意の「訪るる」が響いている。雨風のひどい日に文すらないことを怨む②でも「訪る」が掛詞で用いられている。**○をぎふの風は**…荻の生えているあたりの風は。荻が生い茂っているところを示して「荻生」と詠んだと思われる。「をぎふ」は珍しい詞で、ほかには「あしのをぎふ」のなかをすすむようすを詠んだ③や、「庭のをぎふ」が風にそよそよと音を立てている④にみえる程度。「荻」は、湿地に群生するでイネ科の多年草。湿地に群生し、薄に似ている。秋には黄褐色の穂を出す。葦の別名とされることもあり、さきにあげた③はこの理解の上にできた表現とみられる。⑤のように、荻の葉擦れの音によって秋の到来を知るとも詠まれる。恋歌では、秋風が吹いてもあなたは来てくれない、荻の葉ならば音を立ててくれるのにと詠む⑥のように、葉擦れの音と恋人の訪れとが重ねられる。**○しげけれど**…荻を吹きすぎる風はしきりに吹きつけてくるけれど。この表現の裏側に、手紙がしきり来ているけれどという意を含む。風が「繁し」と、恋文や噂が「繁し」が掛かっている。**○末葉の露はなびかぬものを**…葉先の露は風になびいたりしませんのに。葉先に置いた露は風に揺れて落ちやすいものだけれど、そんな露も今度ばかりは風に靡かないし、私だってどれほど手紙が来てもそちらに心を寄せることはない、と景に心情を重ねている。「露」と副詞「つゆ」が響いている。「末葉」は、草木の先端のほうについている葉。「露」は、秋に草木の葉の上に置くものとして

詠まれることが多く、はかないものの喩えともされる。本詠でも、露は風に翻弄されやすいものと捉えたうえで、そんなはかないはずの露が風に靡かないのだと歌う。風に露が「なびく」（横に流される）と男に「なびく」（心惹かれる）が掛詞。詞書に「文やる人しげく聞こゆる」と、噂について実際のところどうなのか訊ねられたのへ答えたもの。「露」に副詞「つゆ」を掛けて、荻の上葉はすこしもなびかないと詠む⑦に、本詠の表現は近い。

【補説】

詞書に「文やる人繁く聞こゆる」とあるように、周防内侍には言い寄る男がいたことがみてとれる。詞書にみえる「人」は、噂に興味を持った知人であるのか、名を秘められた恋の相手であるのか不明。しかし、本詠の前後に恋愛めいた贈答が並べられていることからすると、ここも両者に恋の色合いが滲むやり取りであるとみておくのが穏当であろう。

五日の日、伊房の中納言

23　我が心あやめの根にやなりぬらん思ひかけつる人のためには

【底本】

いつかの日これふさの中納言

わかこゝろあやめのねにやなりぬらんおもひかけつる人のためには

【通釈】

（五月）五日に、伊房の中納言（から贈られた歌）

私の想いはあやめの根（のように深いもの）となったのだろう、恋い慕ってきた（あなたという）人のために。

【参考歌】

局ならびに住み侍りけるころ、五月六日、もろともに眺めあかして、朝に長き根を包みて、紫式部につかはしける

上東門院小少将

①なべてよのうきに流るるあやめ草今日までかかるねはいかが見る

返し　紫式部

なに事とあやめはわかで今日もなほ袂にあまるねこそたえせね

（新古今集・夏・二二三／二二四）

②つくま江の底の深さをよそながら引けるあやめの根にてしるかな

（後拾遺集・夏・二一一・良暹法師）

③ひたすらにのきのあやめのつくづくと思へばねのみかかる袖かな

（後拾遺集・恋四・七九九・和泉式部）

④心ざし深き沼沼たづねつつ引けるあやめの根のほどを知れ

（住吉物語（真銅本）・二二・少将）

⑤乾く間もなきひとり寝の手枕にあやめのねをやいとどそふべき

（赤染衛門集・四八〇）

⑥色に出でて今ぞ知らする人しれず思ひかけつる深き心を

（本院侍従集・一・藤原兼通）

【語釈】

○五日の日…五月五日に。歌にあやめが詠まれていることから、端午の節句とわかる。①であやめの根とともに歌が送られているように、ここでも伊房が根と歌を周防内侍に送ってきたのであろう。「五日」については、一五番【語釈】参照。根合に出詠された②や、五月五日にことよせて恋人を恨む③など、五月五日にはさまざまな場であやめの歌が詠まれる。**○伊房の中納言**…藤原伊房（長元三年（一〇三〇）～嘉保三年（一〇九六）九月一六日　六七歳）は、父が藤原行経、母は源貞亮女。行成の孫。朱雀帥とも。藤原為房、大江匡房とともに「三房」と称され、博学の士として知られた。承暦四年（一〇八〇）八月一四日に権中納言。寛治八年（一〇九四）五月二五日に大宰権帥。その職権を用いてひそかに契丹と貿易した罪で、正二位から従二位に降格、中納言も停められた。嘉保三年、正二位に復す。世尊寺流を受け継ぐ能筆。『後拾遺集』清書の依頼を受け

るものの、入集歌が一首であることに腹を立てて拒んだ（『袋草紙』・『八雲御抄』など）とされる一方で、伊房筆奏覧本を通俊が秘蔵した（礼部納言家本『後拾遺集』奥書）とも。承暦二年（一〇七八）四月の『内裏歌合』などで清書役を務めたほか、寛治元年（一〇八七）には堀河天皇の大嘗会屏風の筆者となる。永承四年（一〇四九）一一月の『内裏歌合』に出詠。延久五年（一〇七三）二月の後三条院の住吉行幸（続後撰集・神祇・五五五）や承保三年（一〇七六）の大井川行幸（新勅撰集・賀・四八〇）に供奉した。『後拾遺集』以下の勅撰集に五首入集。本詠は、伊房が中納言であった承暦四年～寛治八年までの詠。**○我が心あやめの根にやなりぬらん**…私の想いは、長く伸びたあやめの根のように深いものとなったのだろう。長いものを珍重するあやめの根にかけて、思いの深さを表現している。同じように、深い沼から引いてきたあやめの根の長さで思いの深さを知ってほしいと詠んだ④がある。「あやめ」については、一五番【語釈】参照。三句切れ。「根」にはあなたを思って泣く「音」が響く。⑤は枕上に置かれたあやめによっていっそう涙が誘われたことを詠む。**○思ひかけつる人のためには**…恋い慕ってきたあなたという人のために。下の句が倒置。「掛け」は「あやめ」の縁語。「思ひかけつる」はずっと心に秘めてきた思いを今こそ告げようと詠む⑥に用いられている。しかし、伊房と周防内侍がじっさいに恋仲であったのか、この歌だけで断定することはできない。

【補説】

恋の贈答歌であるのか、五月五日にこと寄せた知人同士の気心の知れた応酬か。実際のところはわからないが、恋の歌と詠みうるやりとりがここでも続いている。

返し

24　かくるより心浅くぞ知られぬる今日は袂をわかぬねなれば

【底本】

返し

かくるよりこゝろあさくそしられぬるけふはたもとをわかぬねなれは

【通釈】

（周防内侍の）返歌、

（送ってくださった根を）かけたときからお心の浅さがわかりましたよ。（五月五日の）今日はどの袂も（濡らしてしまう）根なのですから。（今日泣き濡れているというあなたのお心も、それと同じく通り一遍の浅いものにすぎないのでしょう。）

【参考歌】

①刈る菰のめにみるみるぞ疎まるる心あさかの沼に見ゆれば

（平中物語・第三七段・一四七）

②心浅きみぎはに生ふるあやめ草ひき所なきものにざりける

（東宮学士義忠朝臣歌合・谷中菖蒲・（一番判歌）・藤原義忠）

ことありて播磨へまかり下りける道より、五月五日に京へ遣はしける　中納言隆家

③世の中のうきにおひたるあやめ草今日は袂にねぞかかりける

（後拾遺集・雑三・九九四）

六日、女のもとに言ひつかはしける　道信朝臣

④わびぬれば昨日ならねどあやめ草今日も袂にねをぞかけける

（続古今集・恋四・一二六一）

【語釈】

○返し…周防内侍の返歌。**○かくるより**…お送りくださったあやめの根をかけたときから。根を「掛くる」に、伊房が心を「掛くる」が重ねられている。**○心浅くぞ知られぬる**…あなたの想いが浅いものだとわかりましたよ。目の前の若菰にかけて、男の心浅さが見えてしまうのでどんどん疎ましくなっていくと歌う①は、上の句に歌

われる現状へと至った理由を、「～ば」で終わる下の句で明かすという一首の構想が本詠と似ている。「汀」に「右は」をかけた上で、右歌の「心浅さ」を示す②は、あやめ草を引くということから「ひき所」（特別目をかけるところ）がないと歌っている。**○今日は袂をわかぬねなれば**…五月五日の今日は、どの袂も根をかけて濡れてしまう日ですので。あやめの根のようにあなたへの想いは深いのだという男に対して、女は五月五日は誰もがあやめの根をかけて袖を濡らすのだと根の長さから露けさへと視点を変え、そんな今日に袖を濡らしていると訴えられても、ありきたりで心が浅く思われますと切り返す。菖蒲の「根」に、泣く「音」を重ねて涙を暗示している③や④のように、あやめの根にことよせて涙（泣く音）が袂にかかって泣き濡れていることを詠んで、そこから嘆きの深さを表そうとする歌は多い。また、五月六日に詠まれた④は、袂を濡らす五日を過ぎた今日も泣き濡れていると歌って、やむことのない嘆きを表している。

大原野の行幸に、伊家の弁

25　今もなほ心して吹け紅葉葉の散るををしほの山おろしの風

【底本】

おほはらのゝ行幸にこれいへの弁

いまもなほこゝろしてふけもみちはのちるをゝしほの山おろしの風

【他出】

○『新古今集』神祇・一八九九

大原野祭にまゐりて、周防内侍につかはしける　藤原伊家

千代までも心して吹け紅葉ばを神もをしほの山おろしの風

○『夫木和歌抄』秋六・六二六五・

大原野にて、周防内侍のもとへつかはしける　藤原伊家

今も猶心して吹け紅葉葉の散るををしほの山おろしの風

返事　周防内侍

木枯らしの心して吹くしめのうちは散らぬ梢ぞ大原の山

○『歌枕名寄』雑篇・小塩・山・九四四

千世までも心して吹け紅葉ばを神も小塩の山おろしの風

【通釈】

大原野への行幸（に供奉した）ときに、伊家の弁（が詠んでよこした歌）

今もやはり気をつけて吹いておくれ。（この素晴らしい）紅葉葉が散るのは惜しいのだ、小塩山の山おろしの風よ。

【参考歌】

①夏衣まだひとへなるうたた寝に心して吹け秋の初風

（拾遺集・秋・一三七・安法法師）

②山風も心して吹け紅葉さへ久しかるべき宿と見るべく

（範永集・一六八）

③恋しくは見てもしのばむ紅葉葉を吹きな散らしそ山おろしの風

（古今集・秋下・二八五・読み人知らず）

④今日折らぬ人も誘はぬ紅葉葉に夜のま吹きくな山おろしの風

（中務集・四二）

⑤吹く風もしめのほかまで散らすなよ神もをしほの山の紅葉葉

（実材母集・五七九）

⑥秋の色はまた一しほの紅葉葉に心して吹け山おろしの風

（老若五十首歌合・秋・百廿六番右勝・二五二・後鳥羽院）

【語釈】

○大原野の行幸に…大原野御幸のときに。この大原野行幸については詳細不明であるが、『新古今集』の詞書は「大原野祭」のときのこととする。「大原野」は山城国の歌枕で、乙訓郡の大原野（現在の京都市西京区大原野）のこと。長岡京遷都のときに藤原氏の氏神である春日大社を分祠した大原野神社があり、藤原氏の氏神、王城

鎮護の神として、歴代の行幸や貴紳の参詣がしばしば行われた。鷹狩の地としても有名。御幸の行われた年は不明だが、伊家の活躍期や歌の内容から考えて、後冷泉・後三条・白河いずれかの天皇の御代の秋。後冷泉天皇は承保三年（一〇四八）八月二九日・永承五年（一〇五〇）一一月二八日（『十三代要略』・『孝重勧進記』）、後三条天皇が延久三年（一〇七一）三月二二日（『十三代要略』）、白河天皇が承保三年（一〇七六）八月二九日（『十三代要略』・『孝重勧進記』）に大原野行幸の記録が残る。これらのうち伊家の年齢を勘案すると、詠まれたのは白河天皇が承保三年に行った御幸の折のことか。**○伊家の弁**…弁官である伊家。藤原伊家（生年未詳～応徳元年（一〇八四）七月一日　三七歳、もしくは四四歳（尊卑分脈）とも）は、父は周防守藤原公基、母は和歌六人党の一人である藤原範永女。永保元年（一〇八一）八月八日に権左少弁、蔵人。永保二年に左少弁。応徳元年（一〇八四）一月二三日に右中弁。康平六年（一〇六三）一〇月三日に父が任国で催した『丹後守公基朝臣歌合』（判者は祖父範永）へ出詠したほか、承保二年（一〇七五）九月の『殿上歌合』、承暦二年（一〇七八）の『内裏歌合』・『内裏後番歌合』などに出詠。『後拾遺集』以下の勅撰集に一一首入集。**○今もなほ心して吹け**…今もやはり、紅葉葉を散らしてしまわないように注意して吹いておくれ。二句切れ。「今もなほ」を初句に用いる先行例は少なく、一四世紀あたりから用例が増える。『新古今集』は初句を「千代までも」として、この先もずっと紅葉を美しく保っていてほしいと歌う。「心す」は「気を配る。用心する」の意。「心して吹け」という句が用いられる早期の例としては、夏の名残を残し、一重の衣をつけてうたた寝していると詠み出した『拾遺集』秋の巻頭歌①がある。本詠と同時代の例としては、紅葉を散らさないように「心して吹け」と山風に呼びかける②がみえる。紅葉を散らさないでおくれと「山おろしの風」に呼びかける詠は、③や④など早くから見られる。**○紅葉葉の散るををしほの山おろしの風**…素晴らしい紅葉葉が散るのは惜しいのだ、小塩山の山おろしの風よ。「小塩山」は、山城国の歌枕で、大原野神社をふもとにもつ山。「小塩」山に「惜し」を掛けて「散るををしほ」と詠む句は他にみえない。本集の「散るををしほ」では伊家が紅葉を惜しんでいるのに対し、『新古今集』にみえる「神もをしほの」とすると、伊家ばかりか神も紅葉が散ることを惜しんでいることになる。のちに本詠を下敷きとした⑤では「神もをしほ」と類句を用いて、風に紅葉を散らすなと詠む。「山おろし」は、山から吹き下ろす強い風のことで、結句では山おろしに呼びかけている。「山おろしの風」は新古今歌人らによって詠まれて以降急増する。本詠に先行する③や④は結句に「山おろしの風」を置きつつ、紅葉葉を吹き散らすなと風に呼びかけている。また、『老若五十首歌合』で詠まれた⑥は本詠を下敷きにしている。

【補説】

ある人語りて云はく、「三河守知房詠ずる所の歌を、伊家弁聊か感歎して云はく、「優に読み給へり」と云々。知家立腹して云はく、『予は詩に非ざる事は敵に非ず。而して和歌は頗る彼に劣れり。かくの如く仰せられて云ふは尤も奇怪なり。自今以後和歌を詠むべからず』と云々。優の詞は用意すべき事か。

（『袋草紙』上巻）

先の中宮に、連歌といふ女房に、右中弁伊家、忍びてもの申すと聞こえしかば、ほどもなくおとせずと聞きければ

ある人

まことにや連歌をしてはをともせぬ
　右中弁、「付けよ」と譲られければ
しばしもやとにするゑつけよかし

（散木奇歌集［冷泉家時雨亭叢書］・一四八一）

『袋草紙』（『十訓抄』にもほぼ同様の話がある）には、他人の歌を褒めて、かえって相手を怒らせてしまった伊家の姿が描かれている。

また、『散木奇歌集』の詞書にみえる伊家は、連歌という女房に言い寄っていたことにかけて連歌を仕掛けられたにもかかわらず、自分で返さず俊頼に押しつけて、「しばしも宿に据ゑつけよかし（しばらくだけでも家に連歌を据えておきなさいよ）」という句を付けられてしまった。まだ通いはじめのころで、かつ、すでに関係の切れている女を家に迎え取れと俊頼が表現したのは、「末付けよかし（連歌の付句くらい自分で付けなさいよ）」と呆れたような気持ちが重ねられているため。

こうした挿話からは、一廉の歌人を気取りつつも、肝心なところで今ひとつ決まらない伊家の姿が見えてくる。

返し

26　木枯らしも心して吹けしめのうちは散らぬ梢ぞおほ原の山

【底本】

返し

こからしも心してふけしめのうちはちらぬこすゑそおほはらの山

【他出】

○『続拾遺集』神祇・一四三五

大原野祭にまゐりてよみ侍りける　周防内侍

木枯らしも心して吹けしめの中は散らぬ梢ぞおほ原の山

○『夫木和歌抄』秋六・六二六六　（前歌【他出】参照）

返事　周防内侍

木枯らしの心して吹くしめのうちは散らぬ梢ぞ大原の山

○『歌枕名寄』雑篇・大原　神山野里・九二九

続拾廿　周防内侍

木枯らしも心して吹けしめの内は散らぬ梢ぞおほ原の山

【通釈】

（周防内侍の）返歌

木枯らしの風も気をつけて吹いておくれ。（大原野神社の）標縄の内側は（紅葉の）散らない梢が多いとかいう大原の小塩山（ですから）。

【参考歌】

大原野祭の上卿にて参りて侍けるに、雪のところどころ消えけるを見てよみ侍りける　治部卿伊房

①榊葉に降る白雪は消えぬめり神の心はいまやとくらん

（後拾遺集・雑六神祇・一一七一）

②はふりこがいはふ社の紅葉葉もしめをば越えて散るといふものを

（拾遺集・雑秋・一一三五・よみ人しらず）

③しめのうちの風だによらぬ紅葉かな神の心はかしこかりけり

（赤染衛門集・一五七）

④榊葉のときはならひに桜花しめのうちには散らで年へよ

（顕綱集・四三）

⑤春はなほ残れるものを桜花しめのうちには散りはてにけり

（新勅撰集・神祇・五四八・藤原師実）

⑥春風も心して吹けしめの内は匂ひことなる花とこそみれ

（別雷社歌合・花・十五番左勝・八九・藤原頼輔）

⑦しめのうちは心して降れむら時雨濡れ衣ほしに人もこそくれ

（玄玉和歌集・神祇・三六・鴨長明）

⑧世の中をそむきにとては来しかどもなほ憂きことはおほ原の山

（能宣集・一〇三）

【語釈】

○返し…周防内侍の返歌。『続拾遺集』の詞書は大原野祭参詣した

ときの詠であるとしており、贈歌である伊家詠が『新古今集』に入集した際の詞書と共通する。これらを信ずるならば、大原野祭に参じた折のもので、周防内侍もこれに供奉していたことになるが、本集二五番の詞書には、「大原野の行幸」とある。「大原野祭」は、仁寿元年（八五一）二月に勅祭が行われて以降、毎年二月上卯日と一月中子日に官祭として行われ、勅使のほかに中宮や東宮の使も派遣された。同時代あたりの大原野祭での歌に、榊葉の雪がむら消えになっているのは神が祈りを受けとってくださったからだと詠む①があるが、こちらは二月の祭。**○木枯らしも心して吹け**…木枯らしも気をつけて吹いておくれ。「山おろしの風」に呼びかける伊家詠に応じた表現。二句切れ。「木枯らし」は、木の葉を吹き散らす風で、秋から冬にかけて吹く。贈歌の「山おろしの風」だけでなく、「木枯らし」にも紅葉を散らさないように気をつけておくれと呼びかけている。これに対して、『夫木和歌抄』は「木枯らしの心して吹く」（木枯らしが気をつけて吹く）と表現を変えている。**○しめのうちは**…標縄で囲った内側は。「しめ」は標縄のこと。標縄は、神聖な場所や物を示すために張り、不浄なものの侵入を防ぐ縄。②は、神官がまつる神社の紅葉も、しめで囲われた神域を越えて散ることを歌う。③では、賀茂の中の御社の紅葉が、神の思し召しによって散らずに残っていることを詠んでいる。本詠と同時代あたりの詠では、しめの内の桜は散らないで年を経てほしいとする④や、まだ春なのにしめの内の桜は散ってしまったとする⑤のように、「しめのうちの桜」を詠むことが多かった。のちには本詠に学んだ⑥や⑦などがみえる。**○散らぬ梢ぞおほ原の山**…紅葉の散らない梢が多い大原山なのですから。「おほ原の山」は、大原野の小塩山のこと。「大原」に、散らない紅葉が「多」い、が掛けられている。結句に「大原の山」と詠む例はそれほど多くない。本詠に先行する例として、やはり掛詞をもちいて、つらいことが多い大原野の山であるよと詠む⑧がある。

【補説】

二五・二六番の贈答歌は、大原野御幸の折に眼前の紅葉を題材として歌を詠みかわした社交上のやりとりである。天皇の近臣と女官の交流の一端がかいま見える。

また、周防内侍は、伊家の妻が子を産んで亡くなったときに弔問の歌（四六番）を送っていて、そちらは母（親子）を失った顕季へ弔問歌（四七番）と並べられている。

27　十月十余日、殿上人大井に紅葉見に行く。人に代はりて
いにしへもあらしの山の紅葉葉の堰にかかる色はなかりき

【底本】

十月十余日殿上人大井にもみちみにゆく人にかはりて
いにしへもあらしの山のもみちはのゐせきにかゝるいろはなかりき

【他出】

○『新千載集』冬・六二二

寛治六年十月、殿上の男ども大井河にまかりて紅葉見侍りける時、人に代はりてよめる　周防内侍

いにしへもあらしの山の紅葉葉の井せきにかかる色は見ざりき

○『歌枕名寄』巻二　嵯峨編・嵐山・七〇一

いにしへもあらしの山の紅葉葉のゐせきにかかる色は見ざりき

右一首、寛治六年十月、殿上の男ども大井河にまかりて紅葉見侍りける時、人に代はりてよめるとなん

【通釈】

十月十何日かに、殿上人が大井川に紅葉を見に行く。（それに加わる、ある）人に代わって（詠んだ歌）。

遠い昔にもあるまい（と思われるような美しい）嵐山の紅葉の葉が（大井川の）堰にかかる、その色（ほど素晴らしいもの）はありま

せんでしたよ。

【参考歌】

①いにしへもあらじとぞ思ふ秋の夜の月のためしは今宵なりけり
（新勅撰集・秋上・二五五・源公忠）

②ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くくるとは
（古今集・秋下・二九四・在原業平）

十月の一日に、上の男ども大井川にまかりて歌よみ侍りけるによめる　前大納言公任

③落ちつもる紅葉をみれば大井川堰に秋もとまるなりけり
（後拾遺集・冬・三七七）

④世のつねの紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を
（源氏物語・藤裏葉・四五八・冷泉院）

【語釈】

○十月十余日、殿上人、大井に紅葉見に行く…十月十何日かに、殿上人が大井川へ紅葉を見に行く。『新千載集』六二二の詞書に「寛治六年十月」と具体的な年が示されていて、入集にあたって家集以外の資料を参照した可能性も考えられる。『中右記』寛治六年（一〇九二）一〇月二九日条には「今日有殿上逍遙」との記述があり、さらに頭注には「殿上逍遙大井川」と記されている。しかし、このときに詠まれたことが明確な歌はほかに残されておらず、本詠もほかの機会の詠であった可能性は残る。たとえば、宇多院の大井川行幸を意識して、承保三年（一〇七六）一〇月に白河天皇が行った大井川行幸に供奉した殿上人が、周防内侍に代作を依頼したとも考えられる（補説参照）。「大井」は「大井川」（大堰川とも）のこと。「大井川」は、桂川上流の嵐山のあたりの流れをいう。天皇・上皇をはじめとする貴顕が、大井川を逍遥することも多かった。紅葉のほか、筏師が速い流れを下っていくようすや、鵜飼なども詠じられた。**○人に代はりて**…紅葉見物に行く誰かに代わって、周防内侍が詠んだ。誰の代わりに歌を詠んだのか不明。本詠のほか、四三・七四・七七・八一番歌でも「人にかはりて」歌を詠んでおり、周防内侍はしばしば代作をしている。**○いにしへもあらしの山の紅葉葉の**…遠い昔にもあるまいと思われるような、美しい嵐山の紅葉の葉が。今回の遊覧で目にした紅葉を、これまでだれも見たことがないくらい美しいと称賛する。大井川は、古くから皇族や貴族たちの遊覧の場となり、紅葉をめでる歌もたびたび詠まれてきた。本詠は、そうした歴史を踏まえて「いにしへも」としている。「嵐」に「有らじ」が掛けている。「嵐の山」については二一番【語釈】参照。「いにしへもあらじ」と景の素晴らしさを賞賛した歌は、中秋の名月の素晴らしさを詠んだ①が早くにみえ、周防内侍はこれを本歌として一八番歌を詠じている。『伊勢物語』一〇六段にも収められ、神代にもこのように美しい紅葉はなかったと水辺の景を讃美する②は本詠と発想が近い。**○堰にかかる色はなかりき**…大井川の堰にかかる紅葉の色ほど素晴らしいものはなかったよ。眼前の色彩鮮やかな光景を賞賛する。「堰（ゐせき）」は、水を引くため川の中に柵や石組を設けることで、水を塞き止めたところ。大井川の代表的な景物のひとつとされた。堰に紅葉が「掛かる」と、「斯かる」が掛詞。「斯かる」が示すのは、眼前に広がる大井川の紅葉の他と比べようがないほどの美しさ。本詠の詠歌状況と発想は、大井川の堰に紅葉が散り積もったようすの見事さに、秋はここに行き着いたと詠む③に近い。朱雀院に向けて桐壺帝時代に行われた紅葉賀を称揚する心持ちで詠まれた④では、眼前に散り敷く紅葉は「いにしへのためし」に比肩するものとされている。

【補説】

承保三年（一〇七六）一〇月二四日、白河天皇が大井川行幸を行ったことは著名で、『今鏡』（すべらぎの中・紅葉の御狩）、『十訓抄』、『古今著聞集』（巻第五・和歌）等にエピソードが残る。この折り

に白河天皇自らが詠じた歌が『後拾遺集』に入集している。

承保三年十月、今上、御狩りのついでに、大井川に行幸せさせ給によませ給へる　御製
大井川ふるき流れをたづねきて嵐の山の紅葉をぞ見る
（後拾遺集・冬・三七九）

このとき師房の書いた「初冬扈従行幸遊覧大井河応製和歌一首并序」（『本朝続文粋』）には「高追延長之旧則、重開承保之新儀」とあり、延長四年（九二六）一〇月の宇多院による大井川行幸が意識されていたと考えられる。おそらく白河院の「ふるき流れ」もまた、その意識のもとで詠まれた。また、次にあげる同じ折の歌のなかには、「いにしへの跡を尋ねて」・「流久しきゐせき」など、宇多院の大井川行幸を想起させる表現が織り込まれている。

承保三年十月大井河の逍遥につかうまつりてよみてたてまつりける　大納言経信
いにしへの跡を尋ねて大井川紅葉のみ舟ふなよそひせり
（新千載集・冬・六二三）

承保三年大井河に行幸の日よめる　中納言祐家
大井河けふのみゆきに紅葉ばも流久しきゐせきにぞみる
（新拾遺集・冬・五八七）

細かな日付はあわないが、「いにしへもあらし」と詠じた本詠には、これらと同じく宇多院の大井川行幸を透かし見つつ、今日このときの行幸ほど素晴らしいものはないとの言祝ぎをしていた可能性もあることを指摘しておきたい。

28　春日にて、重資の中納言、梨原におこせたり
思ふこと祈りそひくる木綿襷春日の山の峰の嵐に

【底本】
春日にてしけすけの中納言なしはらにおこせたり
おもふことといのりそひくるゆふたすきかすかの山のみねのあらしに

【他出】
○『新古今集』神祇・一八九五
弁に侍りける時、春日祭にくだりて、周防内侍につかはしける　中納言資仲
よろづ代を祈りぞかくる木綿襷春日の山の峰の嵐に

【通釈】
春日にて、重資の中納言が梨原（にいる周防内侍に歌を）送ってよこした。
願いごとを祈って、寄り添いつづけている木綿襷であるよ。春日山の峰を吹く強い風に対して。

【参考歌】
二月五日、春日使に立ちたりしに、上卿皇后宮権大夫師継。暮程に梨原に着きたれば、夕月夜ほのかに面白く侍りし程、弁内侍、
①　梨原のその名は秋になりならず寝てやは夜半の月を見るべき
（弁内侍日記・一八三）
②禊ぎして思ふことをぞ祈りつる八百万世の神のまにまに
（拾遺集・賀・二九三・藤原伊衡）
③思ふことみわの社に祈りみん杉はたづぬるしるしのみかは
（新後撰集・神祇・七四四・藤原俊成）
④万代を祈りぞかくる長峰の山の榊をさねこじにして（長秋詠藻・悠紀方、近江国、風俗和歌十首・神楽歌・長峰山・二八六）
三位中将実房家にて、祝心をよめる
⑥万代をふべき君とはみかさ山峰の嵐の音にてぞ聞く

⑦春日山峰の嵐も君がため松に吹くなる万代の声
（成仲集・五五）
（春日社歌合・松風・八番左持・七五・俊成卿女）

【語釈】

○春日にて…春日の地で。歌に「木綿襷」が詠まれていることから、『新古今集』一八九五の詞書にあるように、春日祭のために下向していた。「春日」については九番【語釈】参照。○重資の中納言、梨原におこせたり…中納言の源重資が、梨原にいる周防内侍に歌を送ってよこした。『新古今集』は本詠の作者を藤原資仲とする。資仲については補説参照。源重資（寛徳二年（一〇四五）～保安三年（一一二二）　七八歳）は、父が権中納言源経成。承保二年（一〇七五）に少納言。応徳元年（一〇八四）に右少弁、寛治六年（一〇九二）に左少弁、寛治八年（一〇九四）に権右中弁となる。承徳二年（一〇九八）には従四位上・権左中弁。康和二年（一一〇〇）に正四位下・蔵人頭。長治三年（一一〇六）に参議・左大弁。永久三年（一一一五）に権中納言。承保三年（一〇七六）の『殿上歌合』、永久四年（一一一六）の『鳥羽殿北面歌合』など白河院主催の催しに歌人として参加。寛治七年（一〇九三）には『郁芳門院根合』の左方人となる。勅撰集入首歌はない。「梨原」は、内蔵寮の梨原庄のことで、春日祭勅使の休憩所があったところ。『江家次第』の春日勅使次第には、梨原から一条・二条大路を経て興福寺を通り、春日社に至ることが記されている。『枕草子』(むまやは)、『狭衣物語』、『とりかへばや』等にその名がみえる。『弁内侍日記』には、建長二年（一二〇五）に弁内侍が春日祭の使いに立ったときに歌った①が残る。**○思ふこと**…願いごと。願いごとを神に祈ることを詠んだ歌が②や③に見える。『新古今集』は初句を「よろづ代を」とすることで「思ふこと」の中身を具体的に示している。**○祈りそひくる木綿襷**…祈り、寄り添いつづける木綿襷であるよ。三句切れ。「木綿襷」は、木綿で作った襷のことで、白く清らかなものとされ、神事のときに肩からかけて袖をからげた。「掛く」や「結ぶ」にかかる枕詞とされたり、「掛く」を導く序詞に用いられる。本詠には「木綿襷」詠にしばしば用いられる「掛く」がないことから、『新古今集』への採録時に、俊成が仁安元年（一一六六）の大嘗会和歌④に用いた句へと改められたものか。あるいは、作者を資仲とし、初二句を「よろづ代を祈りぞかくる」とする別資料が存在したか。**○春日の山の峰の嵐に**…春日山の峰を吹く強い風に対して。本詠以降の例となるが、⑥や⑦のように春日山に吹く嵐の音によって御世の長からんことを言祝ぐ歌が詠まれており、本詠の「嵐」も願い事を叶えてくれる神威を内包したものとみられる。『新古今和歌集全注釈』は、『漢書』等に見える「山万歳（万代）を呼ぶ」という故事によって天皇の治世の頌歌としたと指摘し、この句を「春日山の峰を吹く、神威を思わせる強い風に対して」とする。

【補説】

『新古今集』は、本詠の作者を藤原資仲とする。藤原資仲（治安元年（一〇二一）～寛治元年（一〇八七）　六七歳）は、藤原資平の次男で、母は近江守藤原知章女。長暦四年（一〇四〇）に右少弁。長久二年（一〇四一）に左少弁。長久五年（一〇四四）に蔵人。永承三年（一〇四八）に右中弁。永承五年（一〇五〇）に権左中弁。天喜六年（一〇五八）に左中弁。治暦四年（一〇六八）に蔵人頭。延久四年（一〇七二）に権中納言・春宮権大夫。承暦四年（一〇八〇）に太宰権帥。永承四年（一〇四九）の『内裏歌合』や永承六年（一〇五一）の『内裏根合』に出詠。『後拾遺集』以下の勅撰集に四首入集。

本詠の作者について稲賀敬二氏は、重資が中納言となったのは周防内侍の没後で、本集には重資のように内侍没後の官名で呼ばれる人物がいないことを問題としつつも、『新古今集』中の周防内侍詠

は基本的に本集と一致すること、重資が「高棟王三代の後孫直材から分かれた内侍の同族」であって、資仲よりも周防内侍との交渉があったことを『金葉集』（二度本・雑上・六〇二／六〇三）などを例として示し、最終的に、重資が作者にふさわしいとしている［『周防内侍家集』の形態とその性格」（稲賀敬二コレクション5『王朝歌人とその作品世界』、笠間書院、二〇〇七年）参照］。

現在残されている資料からは、重資と資仲のいずれが作者として適切か明確にしがたい。ひとまず底本の記述に従って、作者を「重資」として解釈しておく。

返し

29　知らずやは峰の嵐の早くよりいとひもかたき木綿襷とは

【底本】

返し

しらすやはみねのあらしのはやくよりいとひもかたきゆふたすきとは

【通釈】

（周防内侍の）返歌。

ご存じないのですか（、そんなはずはないでしょう）。（春日の）峰の嵐が、昔から嫌いにくい木綿襷なのだと。

【参考歌】

もの憂くて出でぬほどに心地の悪しかりければ、「車給べ」と聞こえたりければ

もろともに逢ひも思はぬ仲らひのくるまはいかに久しとかしる

返し

①知らずやはくるまくるまの久しさを心憂しとはかけて言はねど

（定頼集・一六五／一六六）

伊勢に下りて侍りける頃、顕季卿のもとに言ひつかはしける

源俊頼朝臣

問へかしな玉串の葉にみがくれてもずの草ぐきめぢならずとも

返し　正三位顕季

②知らずやは伊勢の浜荻風吹けば折節ごとに恋ひわたるとは

（続古今集・雑下・一七五九／一七六〇）

③み熊野やいしふり川の早くより願ひをみつのやしろなりけり

（忠盛集・百首・神祇二首・八三）

④吹く風を厭ひもはてじ梅の花散りくる時ぞ香はまさりける

（古今和歌六帖・春の風・三八二・凡河内躬恒）

⑤ひたすらに厭ひもはてじかばかりの月を保てるこの夜なりけり

（玄玉和歌集・天地歌下・一〇八・崇徳院）

【語釈】

○返し…周防内侍の返歌。**○知らずやは**…知らないのでしょうか。「やは」は反語。この句は同時代以前の用例が少なく、①や②のように答歌で用いられて、贈歌に対して「ご存じないのですか、そんなはずはないでしょう」と切り返すものになっている。**○峰の嵐**…春日山の峰の嵐。二八番歌の下の句から詞をとった。**○早くよりいとひもかたき木綿襷とは**…昔から嫌いにくい木綿襷なのだと。本詠は、人々の願いに木綿襷が寄り添ってきたと詠じた二八番歌を受けて、そんな木綿襷だから春日社の神意を含む「嵐」に厭われることはないと歌う。「早くより」は、本詠が神事に用いる木綿襷について歌っていることから、単に過去を示すのではなく、はるか遠く神代の昔を想起させる。③でも熊野は遠い昔から願いを叶えてくれる社だと歌われる。「縒り」・「糸」・「紐」・「固き」は「木綿襷」の縁語。「厭ひも」と歌われるとき、多くは④や⑤のように「厭ひもはてじ」という句を作るが、それを「厭ひもかたき」と言葉を変えたのは、縒った糸、紐が固く強いものであると縁語で示し、嵐と木綿襷の結びつきが強いことを響かせるため。またその奥には、春日社

の神威が堅固で衰えないことも含まれていようか。

〔付記〕翻刻を許可してくださった　公益財団法人　冷泉家時雨亭文庫に深謝申し上げます。